南半球の柑橘類は2024年の出荷が減少

FreshFruitPortal　2025年1月16日

南半球の柑橘類出荷シーズンは数年にわたる輸出の成長に成功した後、2024年はその傾向に追随できなかった。南半球からの柑橘類の総輸出は減少し、これには南アフリカからの供給の減少が主に影響した。

南アフリカは、南半球の合計輸出量（223万トン）の3分の2を占め、この地域で突出して最大の生鮮柑橘類輸出国である。

この国は伝統的に南半球におけるオレンジとグレープフルーツの主要な輸出国である。近年では、出荷量の大幅な拡大により、マンダリンとレモンでも優勢である。一部の栽培面積がまだ最大生産量に達していないため、この成長傾向は依然として有望である。

しかし、今シーズンに対する当初の高い期待は満たされなかった。天候、物流、市場、コストの問題により、予測された輸出水準を達成することは不可能であった。天候の課題は強風のほか、熱波と降霜、干ばつと洪水といった相反する条件を含んでいた。

同時に、収穫された柑橘類は、港への輸送の問題や、保管と船積みの遅延に直面した。

主要市場である欧州連合（EU）では、輸出業者は地中海地域の生産国の産品との競争の激化に直面した。特にオレンジに対する植物検疫要件の厳格化は、南半球の輸出業者にさらなる課題をもたらした。

アジア市場の反応は遅く、予想よりも柑橘類の需要が少なかった。米国向けについては、出荷できる産地の制限と厳格な植物検疫プロトコルにより、南アフリカ産柑橘類の輸出はわずかしかない。

一方、オレンジ果汁業界は昨年、非常に魅力的な価格を提供した。その結果、以前は輸出に向けられていた数量が果汁生産に振り向けられた。

他の生鮮柑橘類輸出国は、近年比較的安定した状況を示している。

チリは総出荷量35万～40万トンで、南半球で2番目に大きな柑橘類輸出国である。2024年シーズンの成果は、果実の種類によって異なった。最も輸出された柑橘類は、マンダリン、クレメンタイン及びそれより晩生の品種である。しかし、悪天候により出荷量は18万3千トンと21％減少し、2023年の記録を維持することができなかった。

レモンは状況が異なり、2年間の困難な年月を経て回復した。オレンジも近年と比較して輸出がわずかに増加した。

ペルーは柑橘類の輸出国の中で南半球の第3位にランクされ、2024年には前年を上回って輸出記録を達成した。柑橘類の総輸出量は21万9千トンに達し、その約80％はマンダリンである。ライム、オレンジ等の他の柑橘類も記録を打ち立てた。

アルゼンチンは同第4位で、主にレモンの輸出国である。しかし、レモンは世界的な供給過剰により、深刻な危機に直面しており、その結果、生鮮輸出が継続的に減少している。

さらに、アルゼンチンの柑橘類生産量の70％を占めるレモン産業は危機的な状態にある。スイート系柑橘類（オレンジ、マンダリン等）は二次的な役割を果たしており、輸出が回復しているものの、レモンの輸出の減少を補うことはできなかった。

オーストラリアは、約20～25万トンのスイート系柑橘類をアジアに輸出している。今年は悪天候により、輸出可能量が近年に比べて減少した。

執筆者：ベティナ・エルンスト（Top Info 社*社長）＊アルゼンチンの果実市場コンサルタント会社

（翻訳は情報の提供を目的としており、特定の企業や製品を推奨するものではありません。）